2021年10月31日（日）主日朝礼拝説教

『主に向かって歌え』井上隆晶牧師
出エジプト記15章1～5節、フィリピ2章6～11節

❶【讃美することは人間の本質であること】

キリスト教が他の宗教と違う所は色々ありますが、その一つに讃美をするという点が上げられると思います。初めて教会に来た人が驚くのは「教会は良く歌う所だ」ということです。仏教でも神道でも鳴り物はあってもあまり歌いません。葬式が一番その特徴を現しています。葬儀なのに歌います。焼き場の前でも歌います。仏教はお経を唱えチーンと言って終わりですが、キリスト教は違います。棺に手を置き、皆で歌いながら天国に送ります。実に明るいのです。人はなぜ歌うのでしょう。人は嬉しいことがあると自然に歌いますし、悲しいことがあると歌で慰められます。歌を聞くと心が癒され、慰められます。
詩編の中に「**主を賛美するために民は創造された。**」（詩編 102：19）という言葉があります。不思議な言葉でしょ。賛美するために人は創られたというのですから、神様を讃美をしている時、私たちは本当の人間になっているということです。だから朝の礼拝に来るとすがすがしい気分になります。
創世記に「**神は光を見て、良しとされた。**」（創世記1：4）とありますが、この「**良しとされた**」はヘブライ語では「キートーフ」といって、直訳で「まことにすばらしい」という意味です。「合格」という意味ではなくて、神様が「まことにすばらしい」と感動していわれた言葉なのです。この神様の讃美が地上に届いて、今度は人間が神に向かって「あなたはすばらしい」といって讃美を返すのです。それが一番現れているのがイエス様の降誕物語です。天使の大軍が「**いと高きところに栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ**」と地に向かって賛美すると、神が人となって生まれたという偉大な出来事を見て、今度は羊飼いたちが神を賛美しながら帰ってゆきます。（ルカ2：14、20）讃美をする時、神と人の交流が始まります。賛美は、神様から人間に贈られた神様と交わる手段の一つなのです。歌を通して私たちは神様と交わり、本来の人間に戻り、癒されるのだという事が分かるのです。

❷【歌の背後には神がなさった出来事がある】

旧約聖書の中にはたくさんの賛歌がでてきます。「イスラエルの賛歌」（出エジプト15：1～19）、「モーセの賛歌」（申命記32：1～43）、「アンナの賛歌」（サムエル上2：1～10）、「ハバククの賛歌」（ハバクク 3：2～19）、「イザヤの歌」（イザヤ26：9～19）、「三人の若者の賛歌」（ダニエル書補遺34～65）。新約聖書の中にも賛歌がでてきます。有名なものは「マリアの賛歌」（ルカ1：47～55）、「ザカリアの賛歌」（ルカ1：68～79）、「シメオンの賛歌」です。受難節になると早課という朝の祈祷文の中に、これらの九つの賛歌がでてきます。今日はこの中から「イ

スラエルの賛歌」を見てみましょう。これは出エジプトを歌ったものです。このエジプトからの脱出体験ほど、繰り返し歌われた出来事はありません。詩編の中でも表現を変えて繰り返し出てきます。この出来事が土台となってイスラエルの民（国家）が誕生したと言えるからです。
エジプト王ファラオは、奴隷であったイスラエルの民を解放しますが、すぐに考えを変え、彼らの後を戦車と騎兵を引き連れて追いかけます。神はイスラエルの民を救うために東風を起こして紅海を分け、海の中に乾いた道を作り彼らを逃がします。彼らを追ってファラオの軍隊が海の中に入ると、神は海の水をもとに戻し、彼らを滅ぼしてしまいます。これが葦の海（紅海）での出来事です。この出来事を歌った最古の歌が「**ミリアムの歌**」です。ミリアムは女預言者で、アロンとモーセの姉です。この時の彼女は 90 歳を超えていたと思われます。彼女はこの驚くべき出来事を見ると、小太鼓を手に取り音頭を取って歌い始めました。すると他の女たちも小太鼓を持ち、踊りながら彼女の後に続きます。三行だけのとても短い歌ですが、繰り返して歌ったのでしょう。
「**主に向かって歌え。**
　主は大いなる威光を現し、
　馬と乗り手を海に投げ込まれた。」（出エジプト記 15 章 21 節）
出エジプト記 15 章にはこの救いの出来事を歌ったもう一つの歌が残されています。それが 1 節から 18 節の賛歌です。モーセとイスラエルの民によって歌われたとされるもので「ミリアムの歌」よりはるかに長いものです。
「**主に向かってわたしは歌おう。主は大いなる威光を現し、馬と乗り手を海に投げ込まれた。主はわたしの力、わたしの歌。主はわたしの救いとなってくださった。この方こそわたしの神。わたしは彼をたたえる。わたしの父の神、わたしは彼を崇める。主こそいくさびと。その名は主、主はファラオの戦車と軍勢を海に投げ込み、えり抜きの戦士は葦の海に沈んだ。深淵が彼らをおおい、彼らは深い底に石のように沈んだ。**…」（1～5 節）
紅海での神がなさった出来事（傍線）と、神をたたえる歌が交互に出てきているのが分かります。聖書の信仰とは、人間から出たものではありません。まず、神の一方的な不思議な「救いの出来事」があるのです。そこから人に「信仰」が生まれるのです。始まりはいつも神様です。私たちではありません。「復活信仰」もそうです。「**本当に主は復活して、シモンに現れた**」（ルカ 24：34）とか「**私たちは見たことや聞いたことを話さないではいられないのです**」（使徒 4：20）と使徒たちが語ったように、本当に起こった出来事なのです。だから強いのです。このように讃美の背後には必ず、何かすばらしい出来事があります。神の救いを目の当たりに見た者が、「あなたはすばらしい」といって讃美をするのです。

❸【神は歴史の中で働き、今日も偉大な業をなさっている】

このモーセとイスラエルの民の歌をずっと見てゆくと、14 節以降に「**諸国の民はこれを聞いて震え、苦しみがペリシテの住民を捕えた。そのときエドムの首長は**

おののき、モアブの力ある者たちはわななきに捕えられ、カナンの住民はすべて気を失った。」（14～15）とあります。ここに出てくるペリシテ、エドム、モアブ、カナンという民族はパレスチナに住む人々で、紅海の出来事から 40 年ほど後に出会った民族です。更に 17～18 節を見ると「**あなたは彼らを導き、嗣業の山に植えられる。主よ、それはあなたの住まいとして自ら造られた所、主よ、御手によって建てられた聖所です。**」とあります。嗣業の山とはエルサレムのことであり、聖所とはエルサレム神殿（紀元前１０世紀に建設）を指しています。葦の海の出来事より 300 年も後の神殿が出てくるのです。つまりこの「モーセとイスラエルの民の歌」はずっと後の時代にできたものだという事が分かります。「ミリアムの歌」は非常に古く、この歌の元歌であって、300 年の間ずっと歌い継がれてきました。その歌を冒頭につけて、それ以降のイスラエルの歴史の出来事を加えたのです。この歌は、神は歴史を通して人類を導き、働いておられるということを教えています。それはイエス・キリストに引き継がれ、彼の死と復活による救いに繋がってゆきます。この神が人になされた驚くべき出来事を忘れないように、民は「歌い続ける」ことで、信仰を継承させてきました。だから「讃美歌」というのは、神の偉大な業を伝えるものでなければならないのです。そもそも礼拝、讃美、聖書朗読、聖餐、これらはすべては聖伝承といって、その昔神がなされた偉大な業を思い出させると共に、神は今も生きておられ、その同じ神が先祖と同じように私たちにして下さる事を体験するものなのです。「**主よ、汝の御国においでになるとき、私を思い出してください**」と歌う時、私たちは十字架の強盗になり、彼と同じようにパラダイスに入るのです。昔の人の体験が自分の体験になり、昔の人の言葉を読む時、その人の上に語られた神の約束が自分のものになるのです。

●柏木哲夫先生は、ニュージーランドのホスピスで行っている「**自分史療法**」を紹介しています。子どもの頃の思い出や、仕事や家庭生活のことを語ってもらい、その患者さんの人生を一冊の本にまとめるのです。この作業を通して自分がどれほど多くの人々の世話になってきたかを思い出し、感謝の思いが出てきて、患者さんは変わるというのです。私たちも神が自分にして下さった大きな業を思い出し、数えてみましょう。どれだけ助けられてきたか思い出しましょう。両親に、祖父や祖母たちに愛されたこと、親戚の叔父さんや叔母さんに愛されたこと、保育園の先生や学校の先生の愛されたこと、友人に救われたこと、先輩の牧師たちや多くの信徒さんに助けられたこと、不思議な出会いがいくつもあったこと、奇跡が与えられたことを思い出します。すべて神様が与えてくれたものであり、私の周りに置いて下さったのです。決して自分の力で集めたのではありません。危険な時も助け出して下さいました。命も生かしてもらいました。旧約の民と同じです。

詩編の中によく「**新しい歌を主に向かって歌え**」と出てくるのは、出エジプトだけでなく、出バビロンのような新しい体験をイスラエルの民がしたからです。信仰の民は神の新しい業を体験する度に、新しい歌を歌ってきたのです。これに勝る喜びはありません。私たちもミリアムのように踊り出し、歌いましょう。